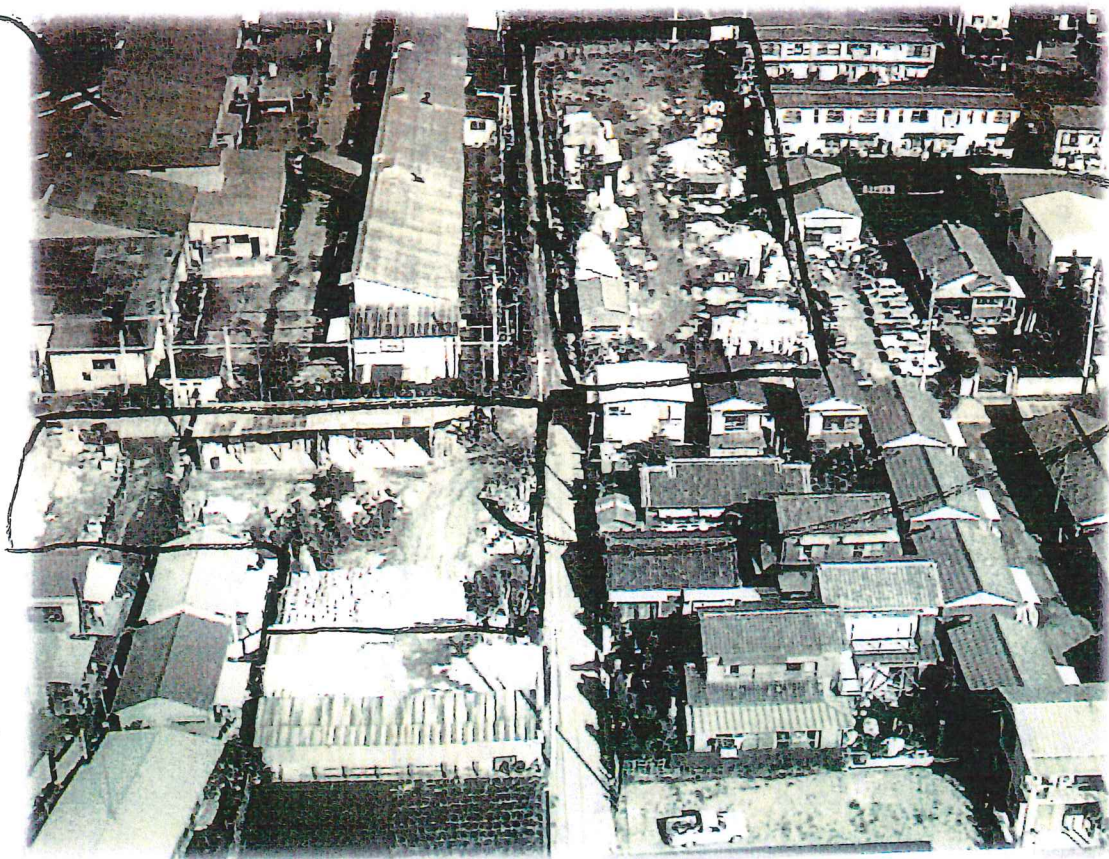


原産業株式会社 創業60周年記念イベント



さいたま芸術劇場(映像ホール)

万谷製菓の工場（現在さいたま芸術劇場）



原産業の石置場

昭和50年頃の航空写真

本日のプログラム

1. オープニングアクト

「小さな恋のうた」

2. 主催者挨拶

3. 与野と原産業の歴史紹介

4. 絵本の朗読

「ママのこむいんとおむい」 「いのりのまつり」

～休憩～

5. 町産物語の朗読

6. 朗読＋音楽＋書道パフォーマンス

7. 「花は咲く」合唱

8. 結びの挨拶

ほら あなたいと 
 ^{だいじ}大事な ^{ひと}人ほど ^{とく}すぐそばにいるの 
 ^{とく}ただ あなたにだけ ^{とく}届いてほしい
 ^{みづ}郷 ^{こい}恋 ^{うた}の歌  
 ほら ほら ほら ^{みづ}郷 ^{こい}恋 ^{うた}の歌

お墓物語 エピソードⅠ

「祖父との出会い」

山梨県 10代 女性

私は一度だけ祖父に会ったことがある。もう二度とない、忘れられない出会い。それは、生や死などとは関係ないと初めて感じたときだったかもしれない。

私が小学生だったある日、母が週末に大切な用事があると言った。それは「お墓を掘り起こす」というものだった。両親は共に幼い頃に父親を亡くしていて、今回は母方の父親のお墓だということだ。私にとっては祖父になるわけだが、「おじいちゃん」というイメージより「写真の中の人」という感じでピンとこなかった。それよりも、お墓を掘り起こしていいのか疑問に思った。

母の話によると、祖父は土葬だったため、お墓を新しくするらしい。土葬は亡くなった人を布団に寝かせそのまま埋めてしまうことで、昔の人はほとんど土葬だと言うことを聞いた。ということは、私は祖父の遺骨と対面することになる。想像してみても少し怖くなったのを覚えている。

そして当日、朝早くから親戚や近所の方々が集まった。小型の重機や手作業によって祖父の姿が現れた。歴史を感じる風貌になっていたが、そこにはたしかに祖父がいた。母や祖母をはじめ、涙を流して再会を喜び懐かしむ人が沢山いた。

私はその様子を見て恐怖などは微塵も感じなかった。それよりも、祖父は愛されているし、それと同じくらい家族や周りの人を愛していたんだと思った。その後祖父は改めて火葬され新しいお墓に納められた。

そこは高台で正面に湖を望むとても良い場所だ。私はなんとなく祖父が喜んでいるように思えて、私自身も嬉しくなった。少し遠い人だと思っていたが、一気に身近な人になったような気がした。そして初めて心から「見守って下さい」と手を合わせた。

昔ながらのお墓のおかげで少し普通とは違うが祖父に会うことができた。そしてお墓は愛されながらも旅立った人が第二の人生を過ごす場所ではないのかと思った。

今も私は定期的にお墓参りに行き、手を合わせて祈る。

お墓物語 エピソード2

「背くらべ」

千葉県 40 代 女性

幼なじみのあきちゃんの長男しんじ君は、中学二年生の春に突然の病を得て亡くなった。

バスケットボールに夢中の背の高い丈夫な子のはずだったのに。彼は小さい頃から大柄だった。あきちゃんは小柄だったので、彼女に会って「誰に似てこんなに大きく育っているの?」と、よく冗談を言ったものだ。

葬儀が終わり、四十九日が済むと、跡取り娘の彼女はしんじ君のためにお墓を建てた。

お盆のお墓参りに同行した私は、墓石の高さに驚いた。周囲のお墓に比べ飛び抜けて高い。お水をかけるにも手が届かないほどだ。

すると彼女は「お水はかけないで。拭いてあげればいい石にしたの」と言うので、手の届くところまで拭かせてもらった。

お墓参りが終わり、私が「立派なお墓、随分と大きくしたのね」と言うと彼女は、
「ありがとう。石屋さんをお願いして、しんじの背の高さ 173 センチにしてもらったの。
うちはまだ下の子たちが小さいでしょ。

しんじの背の高さがわかれば、お兄ちゃんはこんなに大きかったんだってわかるでしょう。

お墓参りをするたびに、弟も妹も、お兄ちゃんと背比べをして大きくなってゆく。

弟はしんじの背を抜かすかもしれない。年だけは確実に抜かしていくけれど。

あの子たちにはどんどんしんじに追いついて、丈夫に長生きして欲しいのよ。

そして、結婚して奥さんや旦那さん、孫たちにも、うちにはこんなに背の高くて立派なお兄ちゃんがいたんだってことを忘れずに伝えていって欲しいのよ」

最後のほうは涙声でよく聞き取れなかったけど、彼女の気持ちは痛いほど伝わり、私はうなずいた。

まだまだ先のことだけれど、あきちゃんが年をとり、おばあちゃんになって、子供や孫たちとお墓参りに来て、孫たちは無邪気にしんじ君のお墓と背比べをする。その頃ようやく、彼女の心も癒えるのかもしれない。背の高いお墓はいつまでも私たちを見送っていた。

第14回お墓参り写真展 奨励賞
「お墓参りに感じた命のつながり」

東京都 30代 女性



5歳の息子とパパが、私が小さい頃から慣れ親しんだ鹿児島のお墓を初めて訪れ拝んでいた瞬間です。

コロナ禍で息子が生まれてからずっと行けなかったお墓参り、やっとやっと来れました。私にとっては、子どものときから変わらない懐かしい時間。二人にとっては、名前も顔もわからないご先祖様との時間。じっと静かに拝んでいたひととき、短いようで長く感じられるほど丁寧にご挨拶してくれていました。

ご先祖様の存在があって、私が生まれて主人と出会い、息子が生まれてきてくれて。このお墓に眠るご先祖様が一人でも欠けていたら、今の私の周りにある温かな家族のつながりはなかったかもしれない。ふと命のつながりを感じて、不思議な気持ちになりました。

この写真を撮って母にみせたところ、『お墓でなんて写真撮ったことなかったねえ』としみじみ話し、大切そうに眺めていた姿も印象的でした。このコンテストを機に写真を撮ったことで、私の中でのお墓への捉え方が変わりました。

お墓という場所は、ご先祖様の存在を感じられる温かな場所。お墓参りは、命のつながりを感じられる機会。次行く時には、このとき抱っこされていた娘も一緒に拝んでいる写真を撮って、母に見せてあげます。

第14回お墓参り写真展 奨励賞
「出会えなかったけれど、大切なひとへ」

京都府 30代 男性



母の日、風がやさしく吹く午後。
私たちは家族で、妻の母のお墓参りに訪れました。
私自身は、生前のお義母さんにお会いしたことはありません。
それでも、会話の中にたびたび登場するその存在は、私にとってもどこか身近に感じています。

この日、息子が墓石を一生懸命に磨いていました。
誰に言われたわけでもなく、ただまっすぐに、その姿がそこにありました。
その横には、赤と淡いピンクのカーネーション。
母の日に、感謝の気持ちをこめてお供えしたものです。

墓前に立ちながら、私はある想いを実感しました。
お墓という場所は、亡くなった方を偲ぶだけでなく、世代を超えて「ありがとう」と伝えることができる場所なのだと。
心のバトンが静かに手渡されていくのだと。

お義母さんへ。
あなたがこの世を去られてから、長い年月が経ちました。
私はあなたの娘と家庭を築き、今ではこんなに大きくなった孫が、あなたに手を合わせています。
あなたの教えや愛情は、きっと妻を通して私たちの生活の中に今も息づいているのでしょう。

どうか、これからも空の上から、変わらぬ愛で見守っていてください。
あなたの娘も、孫も、みんな笑顔で元気に暮らしていますよ。

お墓物語 エピソード3

「墓標の魂」

大阪府 40 代 男性

「お墓は心の中にある」

その言葉を教えてもらったのは、3.11 東日本大震災の時だった。

遠隔地の警察官として人命救助のために派遣された私達は、宮城県下で怪物のように立ち塞がる瓦礫の山と格闘しながら、声を枯らして生存者を捜した。

しかし発見できたのは既にご遺体となった方ばかりで安置所となった小学校の体育館にご遺体を搬送する日が続いた。途方もない数のご遺体に約一か月が過ぎても葬儀会社は予約が一杯で、納棺されたままのご遺体は保存に限界が来ていた。

やがて行政機関が遺族の承諾を得て、山の上に仮の墓地を作って土葬での仮埋葬をすることになり、私達はスコップで仮の墓地を掘り広げる作業に従事した。その際に傍らで耳にした遺族の絶叫、慟哭、号泣を私は忘れることが出来ない。

「父ちゃん!父ちゃん!こんな所にしか埋めてあげられんで。ごめんな、ごめんな!」と、号泣されていた漁師の息子さんの姿を。

「今度産まれてもさ、絶対に、絶対に母ちゃんの所に産まれて来るんだよ、絶対だよ!」幼い長女の棺を抱きしめた母の慟哭を。

職業柄、これまでに多くのご遺体に接してきた私さえも、これほど多くの悲哀の極限に居合わせるのは初めての経験だった。当時、仮埋葬の場には多くの僧侶が遺族のために立ち姿でお経をあげていた。その時に若い僧侶がお経を終えた後で、ご遺族の方々に説法していた時の言葉が私の胸に強く響いた。

「確かにこれは仮埋葬です。ですが、一つひとつの墓標には魂があります。だからお墓は心の中にあると思って下さい。心の中のお墓に手を合わせて祈ってあげる。ご遺族の念が強ければ強いほど、ご浄土に行けるのです」

墓標には魂がある。僧侶のこの言葉を傍らで聞いていた私達のスコップを握る手に自然と力がこもった。図らずも震災の犠牲になった人達のために、そしてご遺族が心の中にあるお墓に手を合わせる力になれるように。

そんな私達を東北の遅い桜が見守っていた。

「花日咲く」

6 ^{きず}傷ついて ^{きず}傷つけて
^お報われず ^な泣いたりして
^{いま}今はただ ^{いと}愛おしい
^{ひと}あの人を ^{おも}思い出す

8 ^{はな}花は ^{はな}花は ^{はな}花は ^さ咲く
^ういつか ^おほまれる君に
^{はな}花は ^{はな}花は ^{はな}花は ^さ咲く
^{はな}わたしは ^の何を残したんだろう